

(例 1 (開削工法))

## 施 工 説 明 書

管渠（内径 500mm）埋設の工法は、下図に示すとおり開削によるものである。  
山留工法としては、軽量鋼矢板（長さ 3.0m）を用い油圧式圧入機にて杭の打ち込み、引き抜きを行った。

掘削は、バックホーを主に使用した。

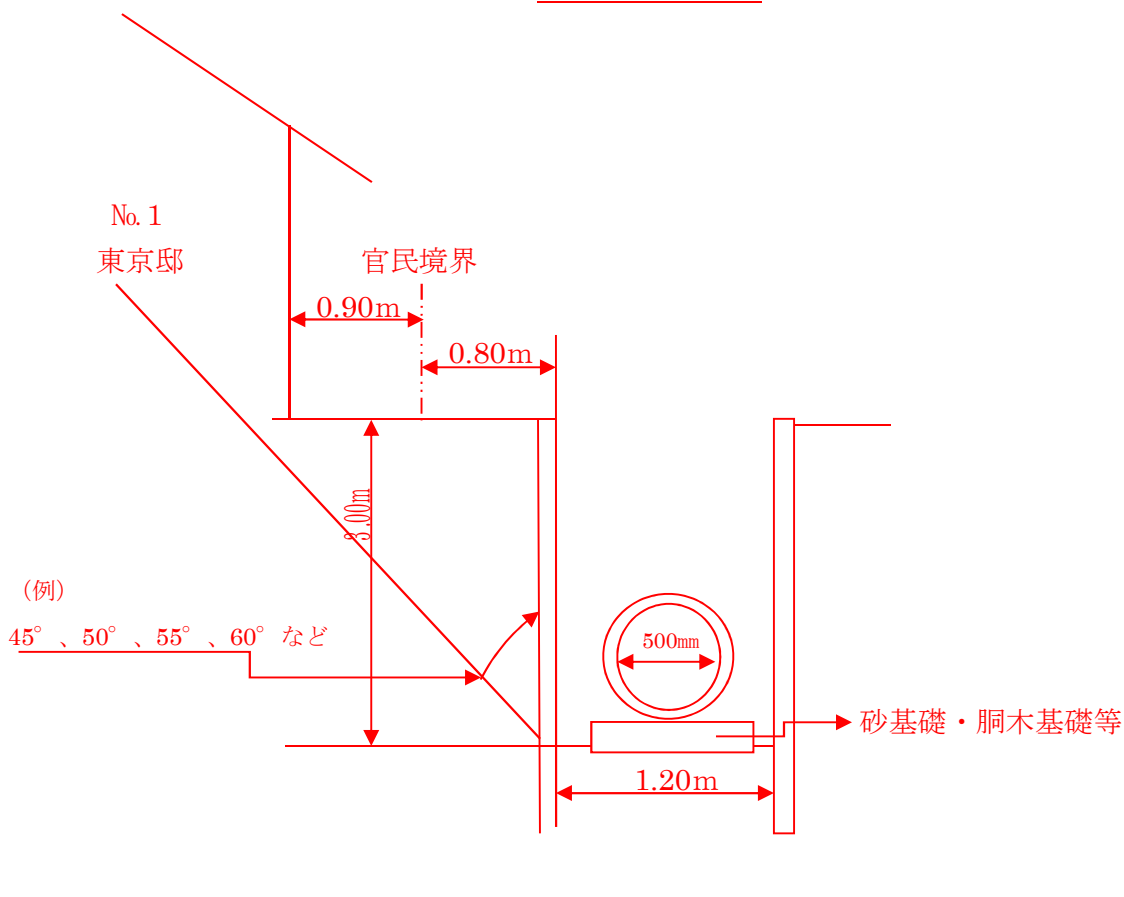
埋め戻しは、下記の管渠敷設後、全断面について砂埋め、締固めを行い、その後矢板材を慎重に抜いた。

施工延長を 20m 毎に区切って施工し、逐次工事を進めた。

---

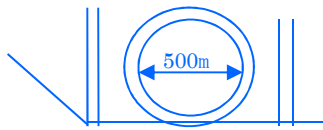
新宿区西新宿一、二丁目付近再構築工事

掘 削 断 面 図



(A 4 タテ)

- (注) 1 工事と調査物件との位置を明示する。
- 2 調査対象物件の図に、事後調査一覧表の整理番号及び物件所有者名を記載する。
- 3 外構（門・柵・塀）がある場合は、その位置も記載する。
- 4 調査対象物件の配置に沿った図にすること（同じ図を使用し、数値等だけを変更しないこと）。  
掘削深さ、掘削幅、官民境界までの距離は縮尺を整合させる。
- 5 掘削断面図には、掘削床付け位置から影響線を表示し、その影響角度を記入する。（例：45°、50°、55°、60° など）
- 6 基礎のない場合の記載例



- 7 内面被覆工法の場合は、管底深さ、下水道管の占用距離、建物から官民境界までの距離を表記する。
- 8 断面図に表示する建物は、下水道管の下流に向かって表示する。（右、左）